

議事開クニ議論紛々分レ甲説ハ多數ヲ占メ乙説ハ一名  
若クハ二名ノ少數ナリ是ニ於テ議長ハ甲説ヲ可ナリトシ  
テ之ニ決セリ然ルニ乙説ヲ主張スル者ハ自己ノ意見ニ反  
對ノ決議ナリト以テ判決書ニ署名捺印スルコトヲ拒メリ右  
ハ果シテ之ヲ拒メテ權利有之哉若其權利アリトスルキ  
ハ議事定數ニ滿タズシテ定例ニ違フ更ニ他ノ議員ヲ召集  
セシカ議事員亦異論アルキハ終ニ裁判終局ニ至ルノ期ナ  
リ故ニ斯ノ如キ場合ニ際シテハ甲乙二説ノ論旨ヲ軍法會  
議ノ記録ニ詳記シ後日ヨリ存シ得判決書ニハ總令反對ノ論  
者ト雖モ審問及議決ニ立會タル証トシテ署名捺印セシメ  
可然ト被考候得共未タ一定ノ例規モ無之候間御指令相成  
度此段相候也

退テ議論二個以上ニ岐レタルキハ此説ノ多寡ナ間ハ之  
ヲ決スルハ專ラ議長ノ權ニ委ズベキヤ又ハ多數ニ依テ議  
決シ同數ナルキハ輕キニ從フ等ノ法ヲ用フベキヤ是又併  
テ相候也  
右指令 伺之數多數ノ説ニ決スルモ議長ノ意見ニ決スル  
モ既ニ決定シタル上ハ即チ其軍法會議ノ議定トス仍テ各  
自署名捺印スベキ儀ト可相候事  
秋田縣ヨリ陸軍省ニ伺並ニ指令  
徵兵令第二十一條及第二十二條ニ因リ地方長官ニ於テ撰  
任スベキ地方徵兵員及筆生給料ノ儀ハ徵兵入營定則第  
八九兩條ニ據リ支給スベキ勿論ニ候處右給料ノ儀ハ命  
タル日ヨリ解免ノ日マデ則徵兵票及檢査所へ出頭セザ  
ル日及他郷ニ出テ旅費或ハ滞在日當等支給スル日ト雖  
モ該給料ハ支給シ可然哉懸シシ難關ヲ生シ目下支給方差  
支候條至急何分ノ御指揮有之度此段相候也  
右指令 伺之數徵兵票等へ出願セザル日ハ日給支給ニ不  
及他郷出テ旅費及滞在日當ヲ給スルモ尙給料ハ支給可致  
儀ト可相候事

○山梨縣ヨリ陸軍省ニ伺並ニ指令  
豫備兵及備兵ヲ以テ官廳ニ登用セント欲スルルハ後備軍  
司令部條例第廿五條ニ依ルベキノ處町村役所ニ於テ書役  
ニ採用セントスルハ別段適當ノ例規モ無シ付テハ如何  
相成得可然哉懸掛候儀有之候ニ付何分ノ御指揮相仰候也  
右指令 伺ノ振町村役所ノ書役ハ所管領臺へ協議ニ不及  
適宜採用不苦候事

叙任賞勳  
○八月二十六日分  
特旨ヲ以テ階級被遷候事  
叙正六位 正七位 柴山 典  
任東京大學教授 正七位 櫻井 鏡二  
○今月二十四日分  
○明治十四年十月二十八日分  
從五位 五條 爲明  
太田代源吉 松野久章 小谷永壽 宮川吉政  
尾崎昌三郎 小野彌三郎 大西寅吉 中村幸誠  
杉長房 原田保明 福谷茂輝 高橋正義  
陸軍兵卒服役中鹿兒島海軍征討ニ際シ盡力有功不少候ニ  
付勳八等ニ叙シ白色桐葉章下賜候事

時事新報

竹添大書記官歸京  
竹添外務次書記官ハ過般比叡艦ニ搭シテ仁川ニ行キ本月  
廿五日明治丸ニテ歸航ニ付花房公使使入京ノ挨拶傳聞  
ノナキハ前号ノ雜報ニ記シタル通りナルガ此報道ニ就テ  
先ハ我輩ヲ喜ブ可キモノハ仁川へ我軍艦ノ到着其期ヲ誤

ザリレノ一事ナリ實ハ今日ナレバコソ之ヲ公言スレモ  
本月十六日上海ヨリノ電報ニ馬建忠、丁汝昌ハ軍艦ヲ以  
テ本月五日芝罘ヲ離シテノ事ヲ聞キ海上ノ里數ヲ計  
ルニ芝罘ヨリ仁川へハ二百七十里ニシテ下ノ關ヨリ仁川  
へハ五百里トアリ加之我々剛艦ハ本月六日下ノ關ヲ發  
シ明治丸ハ十日、比叡艦ハ其翌日出發セタルコトナレバ凡  
ソ一倍ノ海路ニ向テ出發ノ日ハ遙ニ後レタリ故ニ前後コ  
ノ三艦ガ仁川入港ノ時ハ支那艦ハ數日前ニ到着シテ馬建  
忠ノ如キハ疾ク既ニ京城ニ入りケル跡ヲ恰モ支那ハ  
先鞭ヲ着ケテラレタルノ有様ナラント竊ニ心ヲ勞シ遺憾ニ  
思ヒシガ何ソ科ヲ今日報道ノ實際ニ於テハ則チ然ラズ  
金剛艦ノ入港ハ九日ヨリ支那艦ニ先ツツ一日、又明  
治丸モ海路非常ノ風波ナカレバ十二日ノ午前ニ達シケリト  
云フ明治丸ハ素ト燈臺ノ川ニ供シタル官船ニシテ其速力  
平均十節内外ノモノトハ曾テ聞タレバ十日ノ曉四時下ノ  
關ヲ發シテ十二日ノ午前十一時仁川着トアレハ其時間五  
十五時ニシテ五百里ヲ走りケリ尋常ノ海ナラバ格別ナレ  
バ大風波ヲ犯シテ一時ニ凡ソ十海里ノ割合トハ風波ニモ  
拘ハズ十分ノ速力ヲ逞シタルモノト明ナリ運用ノ巧ニ  
テ我海軍ノ活潑ナル以テ見ル可シ又近頃釜山浦ヨリ歸京  
ヒシ某ノ話ニ同破砲船我清輝艦ノ乗組ハ校尉以下水夫  
主マデモ品行正シシ艦内ノ号令嚴明ニシテ齊々肅々他  
國艦ノ及テ所ニ非ズ日韓ノ別ナク皆敬賞セザルハナラ  
トナレバ是レハ獨リ清輝艦ニ限ラズ今回仁川碇船ノ軍  
艦ニ於テモ同様ナル由、軍艦ノ号令嚴明ナル可キハ當然  
ノコトナレバ壯年ノ軍人動モスレバ粗暴ノ舉動ナキヲ保シ  
テ世界中ノ通稱ニシテ今我軍艦ニ限リテ其弊ヲ見ル  
少ナシ特ニ斯ル事變ノ際、戦和ノ二途サハ未決ノ他國ニ  
在テ特ニ齊肅ナルハ我輩ノ欣喜ニ堪ヘザル所ナリ

又花房公使着港ノ上十四日ハ伴接官尹成鎮京城ヨリ來  
リ其翌日ハ芝罘運モ亦來リ共ニ彼ノ政府ノ命ヲ傳ヘテ城  
中ノ民心尙未タ鎮定セザルコト付キ公使ノ入京ハ暫ク猶豫  
アリタリトノ懸念ナレバ之ヲ聽カズ十六日拂曉仁川ヲ出  
發シテ進京ノ途中京畿道ノ觀察使洪祐昌モ楊花鎮マデ待  
受ノタメニ出張又候暫時城外ニ滞在シテ依頼ナレバ固ヨ  
リ承知ス可キ事ナラシキ其旨ヲ述ヘテ直ニ發進無事ニ入  
城シタリト云フ以前日本ノ公使館ハ清水館トテ城外ニ在  
テヌラ此館ニ日本人ノ居ルハ大院君ヲ始メ昔日ノ斥獲家  
ハ甚タ不快ノ事ニ思ヒシモ今度ハ其日本入ガ深ク城  
内ニ入り然ルモ八百ノ護衛兵ヲ率ヒテ直ニ王宮ノ傍ニ乘  
込タルコトナレバ朝野人心ノ狼狽顛覆懸念ヲ切シ去由ニ十  
三日清水館ヲ襲撃シテ僅ニ幸シシテ金テ誤テ之ヲ  
逸シテ邊念ニ思ヒ居ル彼兇賊ノ輩モモタ縛一就カズ  
コナレバ今度公使ノ入城ハ竊ニ遠方ヨリ眺メテ益懸念

チ増スコトナラント雖モ氣ノ毒ナガラ如何トモス可ナザル  
ノミナラズ今後談判ノ進ムコト從テ彼ノ輩ハ縛セテテ亂  
同ヲ受ケ其巨魁タル者ハ刑ニ處セラル、コトナラシ氣ノ  
毒ナリト云フ可シ

又支那ノ馬建忠、丁汝昌ガ率ヒタル三艦ハ我金剛艦ニ後  
ル、コト一日、明治丸ニ先ツツコト一日、本月十日仁川ニ來着  
シ花房公使モ馬氏ニ面會又竹添大書記官モ仁川滯留中慶  
々往來談話モ多カリシ由ナルガ馬氏ノ口氣ハ甚タ平穩ニ  
シテ日本ヲ疑フ様子モナク朝鮮ヲ中國所屬之邦トシテ言  
ハ決シテ口外セザリシヤノ由、又馬丁兩氏ガ着港ノ上モ  
直ニ京城ニ入ルルニ非ズ加之朝鮮ノ民情ヲ目撃シテ護衛ノ  
兵ナクテハ不安心トテ丁氏ハ早々天津ニ歸テ兵ヲ催促ス  
ルト云フ程ノ有様トレバ支那政府ハ初ヨリ事變ノ甫シテ  
モ知ラザルハ無論、今後トモ日韓ノ間ニ立入ラントス  
ル念慮ハナキ者ノ如シ故ニ今日都テ此事情ノ表面ヲシテ  
内實ノ裏面トモ相違スルコトナカラシメ馬氏來韓ノ主意  
ハ單ニ朝鮮政府ニ忠告スルニ止マリテ日韓ノ關係ハ日韓  
兩政府ノ談判ニ任スルコト於テハ平和ノ局ヲ結フコト甚タ易  
クシテ甚タ迷ナル可シ和戰ノ分ル、所ハ唯支那政府ノ意  
見如何ニ在テ存スルノミ而シテ其意見ノ表裏ハ外交ノ機  
密ニシテ他國人ノ知ル可キモノニ非サレバ我輩ハ刮  
目シテ今後ノ運動ヲ見ント欲スル者ナリ

雜報

○大山陸軍卿 同君ハ令聞死去ニ付喪中出省を遺慮セ  
られし處目今朝鮮事件等ニ殊の外御多忙の折柄されバ  
喪服の支へ出省致すべき旨内達ありしや又聞けり  
○新造軍艦 兼て前號ニ記載せし如く橫濱造船所ニ於  
て先年より製造し着手せられ去海門艦の念、今二十八日  
午後三時三十分進水式を執行する、よし右ニ付東京より  
東伏見宮と始め大臣參議の方々杉宮内大輔此外喪任官  
數名臨場せらるゝと又同艦の形造り左の如しといふ  
四等軍艦海門號

載貨水線の長さ 二百〇一尺七寸九步五厘  
中央最大幅 三十二尺六寸七步  
吃水ノ深サ平均 十四尺五寸二步  
總噸數 千三百七十噸  
名稱馬力 二百五十馬力  
船形 コルベルト  
右海門號の船圖ハ亦極少將器械ハ渡邊造船所長の製圖ニ  
成る者として毫も西洋人の手を假らず總身機材を以て之  
を造り其堅牢あること我國未曾有の良艦ありといふ尤も  
下橋の良材ニ乏しカ爲め一時機問艦の下橋を抜き取り  
て其用ニ供せらるゝと又同艦入水式終るの後の同形の  
新艦製造は取り掛かるゝ由にて既述其機材中なり又當時  
製造中なる海門號艦落成を急ぐるゝと現今の職正にて